

2.4 地区別の概要

調査地域を区分ごとに、地形や緑のまとまり、植生や林床の植物の状況、水辺の環境、そこに生息する生物を調べました。結果の概要は以下のとおりです。

VII 遠藤原台地

地形の骨格をなす遠藤原台地の一角をなします。台地上に畑がひろがり、里山の自然を縁取る環境になっています。

畑地が多く、樹林が少ないため、草地を好む、キジやヒバリなどの指標種が生息しています。

IV 金目川段丘

畑地として利用されている平坦面がひろがり、段丘崖の斜面には樹林が帯状に残されています。平坦面は、遠藤原台地の中核をなし、段丘崖に続く樹林は緑の中核となっています。

大部分が畑地であり、草地の指標種である、キジ、ヒバリ、明るい樹林の指標種であるキンラン、樹林を好むコゲラなどがみられます。



西部丘陵地域 (2001年4月)

VIII ゴルフ場

もともとの自然は改変されていますが、座禅川上流と鷹取山山麓の緑をつなぐ位置にあります。ゴルフ場であるため、芝地、修景用の植栽樹木、人工池からなり、種数は少ないものの、樹林の指標種であるホトトギスやウグイス、水辺の指標種であるセグロセキレイなどが生息しています。

V 金目川低地

金目川沿いの低地に、畠地と水田が広がっています。それに面する斜面には樹林が分布しており、西部丘陵地域では稀な河川沿いの生態系をかたちづくっています。

斜面沿いの樹林には、樹林の指標種であるキンラン、畠地には草地の指標種であるキジ、斜面から流れる水辺や金目川沿いの水田には、水辺の指標種であるカワセミ、ヘイケボタル、ドジョウなどが生育、生息しています。

VI 不動川中流

畠地と住宅地が主体となっていますが、ところどころに二次林が点在する環境です。また、地区内を不動川が流下していることから、水辺の環境も存在します。

二次林には樹林の指標種であるキンランやエビネが、畠地などの農耕地には草地の指標種であるヒバリ、河川沿いには水辺の指標種であるコサギやハクセキレイが生息、生育しています。

III 神奈川大学周辺

農地が多く、大学や住宅街が比較的多い地域ですが、丘陵斜面や金目川沿いの段丘崖にまとまりのある樹林が点在しています。また、座禅川沿いの低地や小規模な谷戸には水田や水田跡に生育するヨシやイグサ科などの植物群落もみられ、良好な里山の自然が残されています。このことから様々な環境の指標種が確認されています。

樹林の指標種であるキンラン、エビネ、水辺の指標種であるヤマセミ、カワセミ、ニホンアカガエル、ホトケドジョウなどが生息、生育しています。

II 鷹取山山麓

鷹取山山麓にまとまりのある樹林がひろがるとともに、渓谷状の谷には清流が流れ、霧降りの滝やため池（吉沢の池）もあり、水環境も豊かです。林内は、奥山を思わせる環境であり、座禅川上流と並び、特に豊かな自然環境が残されている地区です。

樹林と水辺がセットで存在している環境を反映して、樹林の指標種であるキンラン、エビネ、サンコウチョウ、オオルリなどが、また水辺の指標種であるイワボタンやホトケドジョウなどが生息、生育しています。

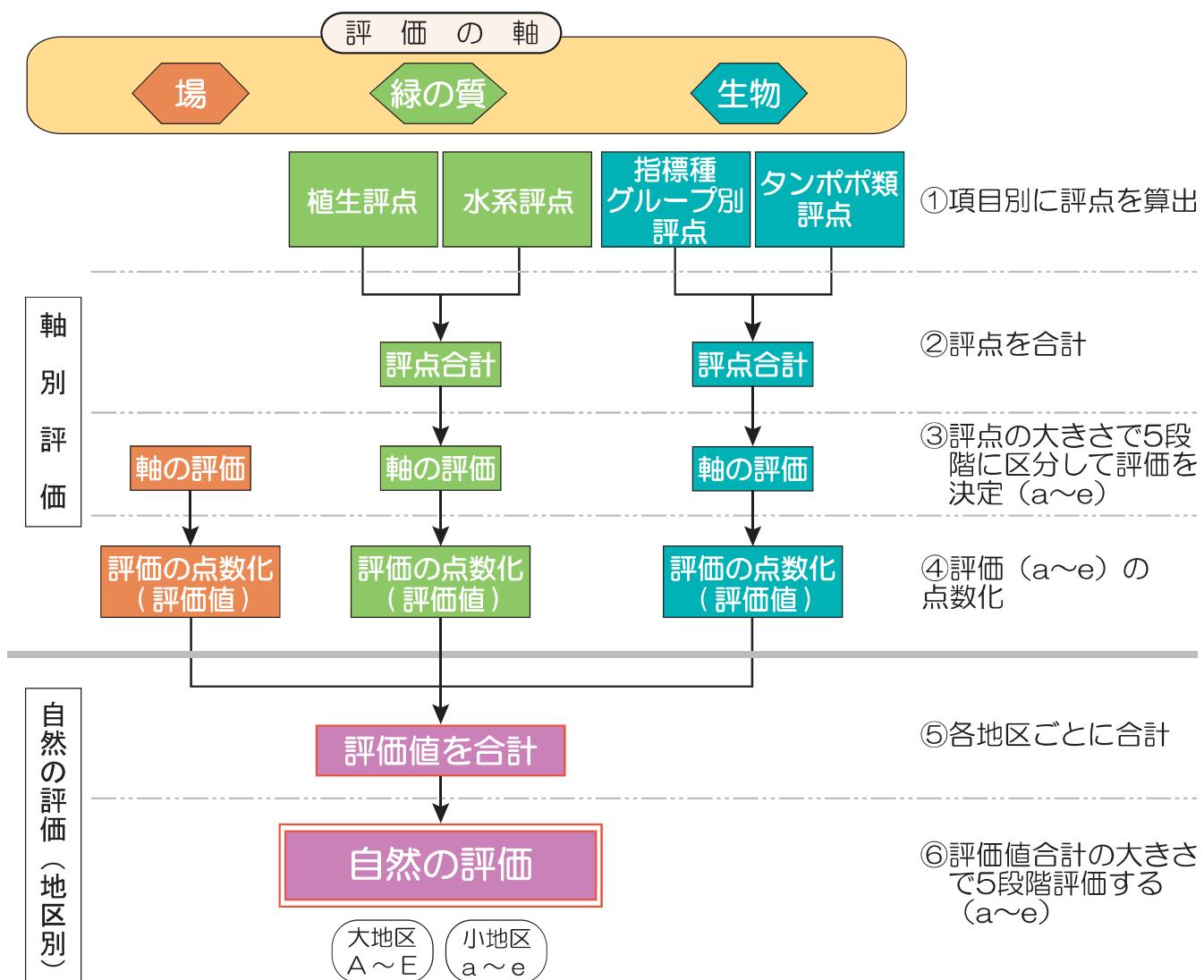
I 座禅川上流

愛宕山周辺のまとまりのある樹林と、駒ヶ滝付近の谷戸の水田が混在した環境が特徴的な地区で、鷹取山山麓地区と並び、調査地域の中でも特に良好な里山の自然が残されています。斜面には、二次林が広がり、また丘陵の低地には谷戸が残されています。

樹林と水辺がセットで存在している環境を反映して、樹林の指標種であるキンラン、エビネ、水辺の指標種であるヘイケボタル、ゲンジボタル、ホトケドジョウなど、また生息に広い面積を必要とするオオタカなどが生息、生育しています。

2.5 評価方法

生物編の評価は「場」「緑の質」「生物」のそれぞれをa～eの5段階に評価し、さらに3つをまとめて地区ごとに自然評価として算出しました。手順は以下のとおりです。



【場の評価】

地形図や植生図を参照しながら、下表の基準により5段階に評価しました。

◇場の評価基準

評価	基 準
a	地域の骨格となる地形と、まとまりのある緑地がある
b	まとまりある緑地が大半を占める
c	緑は少ないが、地域の骨格となる地形がある
d	中核となる緑地をつなぐコリドー ^{*3} である
e	緑は存在するが、まとまりが少ない

*3 コリドー：コリドーは「緑の回廊」とも呼ばれ、野生生物が移動できる経路のことを指す。

【緑の質の評価】

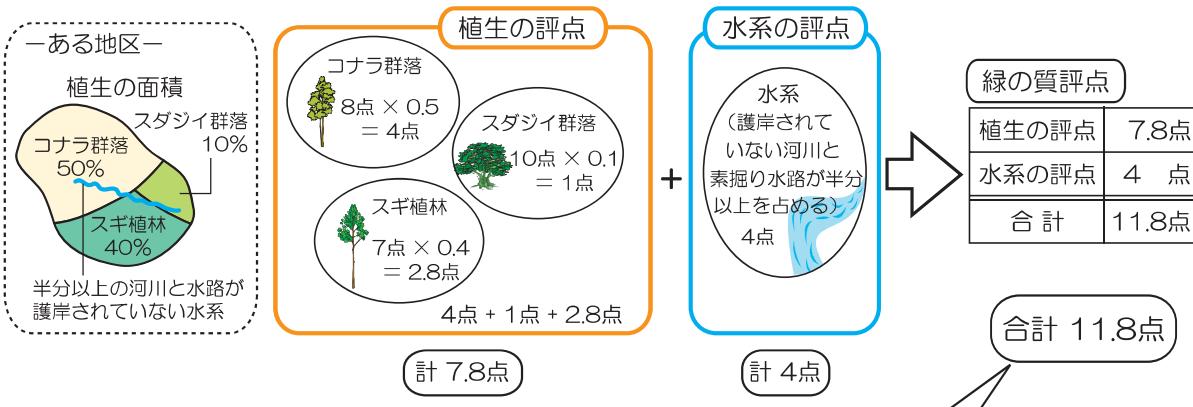
植生と水系で個々に評点を算出し、その合計の大きさで5段階に評価しました。

緑の質評点 = (植生の凡例ごとの評点 × 地区における面積割合) の合計値 + 水系の評点

緑の質の評点計算例

一ある地区の場合ー

植生の面積割合が、コナラ群落（50%）、スギ植林（40%）、スダジイ群落（10%）で素掘り水路がある。



この「ある地区」が小地区であるとします。実際の緑の質評点の最高点は 12.1 点でした。

11.8 点は 12.1 点の 97% で、最高点の 80% を超えるので、この地区の評価は「a」になります。

◇植生の評点

評点	群落名
10	スダジイ群落 ケヤキ群落 ヨシ群落
9	ムクノキ-ケヤキ群落 水田放棄植物群落（湿性植物群落）
8	コナラ群落（林床開放型） コナラ群落（林床低木型） 谷戸の水田
7	コナラ群落（林床ササ密生型） スギ植林
6	モウソウチク・マダケ林 陽性低木群落
5	アズマネザサ群落 スキ群落 伐採跡地 畠放棄植物群落
4	果樹園 苗木畠 樹木植栽地 水田
3	畠 緑の多い住宅地
2	芝地、グランド 草地（人工法面など）
1	住宅地、道路 造成地

◇水系の評点

評点	水系の内容
5	護岸されていない河川と池、素掘り水路のみが存在。
4	護岸されていない河川と素掘り水路が半分以上を占める。
3	護岸されていない河川と素掘り水路が半分以下である。
2	護岸されていない河川と素掘り水路は少ない、または無いが片側護岸や、水辺護岸の河川がある。
1	三面コンクリート張り水路、U字溝、人工池である。
0	水辺が無い。

◇緑の質の評価

評価	評価合計値の内容 (最高点に対する評点の割合)
a	80%以上
b	60%以上～80%未満
c	40%以上～60%未満
d	20%以上～40%未満
e	20%未満

【生物の評価】

各地区で確認された指標種（グループ）の評点の合計値の大きさで5段階に区分しました。

生物評点=地区内で確認された指標種（グループ）の評点の合計値+タンポポ類の評点の平均値

注1) 指標種：その種が確認されれば評点を与えました。

注2) 指標グループ：そのグループのうち、1種が確認されれば評点を与えました。

注3) 例外としてタンポポは在来種と外来種の優占割合から評価しました。

◇各環境タイプ別の指標種グループと評点

評点	樹林の存在を指標する種	水辺（水田,水路,河川など）の存在を指標する種	草地の存在を指標する種
	猛禽類グループ		
3点	サンコウチョウグループ キンラングループ	ホタルグループ ホトケドジョウ イワボタングループ ヤマセミグループ	在来タンポポのみ
2点	キビタキグループ ヤブコウジグループ ハンミョウ	キセキレイグループ カエルグループ ヨシノボリグループ シマアメンボ ハグロトンボ	在来タンポポ優占 オナガササキリ セッカグループ
1点	ヤマガラグループ クロカナブングループ	コサギグループ キツネノボタングループ ドジョウ オニヤンマ	外来タンポポ優占 ヒバリグループ

◇タンポポ類の評点

区分	評点	内 容
在来タンポポのみ	3	カントウタンポポ、シロバナタンポポのみ
在来タンポポ優占	2	カントウタンポポ、シロバナタンポポが多い
外来タンポポ優占	1	セイヨウタンポポ、アカミタンポポが多い
外来タンポポのみ	0	セイヨウタンポポ、アカミタンポポのみ

タンポポ類は、各地区に複数の調査地点があり、調査地点ごとに該当するグループを判定しています。そのため、各地区的タンポポ類の評点は、地区内の調査地点ごとのタンポポグループの評点の平均値としました。

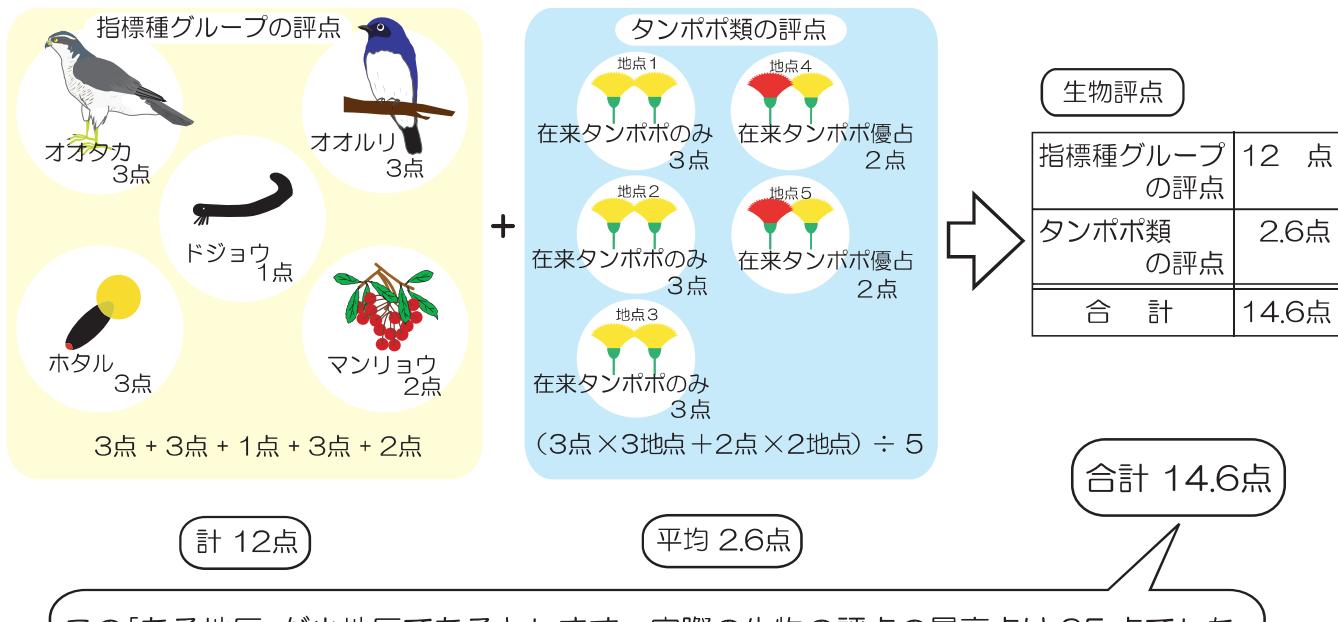
◇生物の評価

評価	評価合計値の内容 (最高点に対する評点の割合)
a	80%以上
b	60%以上~80%未満
c	40%以上~60%未満
d	20%以上~40%未満
e	20%未満

生物評点の計算例

ーある地区の場合ー

生物指標種はオオタカ、オオルリ、ホタル、ドジョウ、マンリョウを確認した。タンポポの調査地点は5箇所で、在来タンポポのみの地点が3箇所、在来タンポポ優占地点が2箇所であった。



この「ある地区」が小地区であるとします。実際の生物の評点の最高点は35点でした。
14.6点は35点の41.7%になるので、この地区の評価は「c」になります。

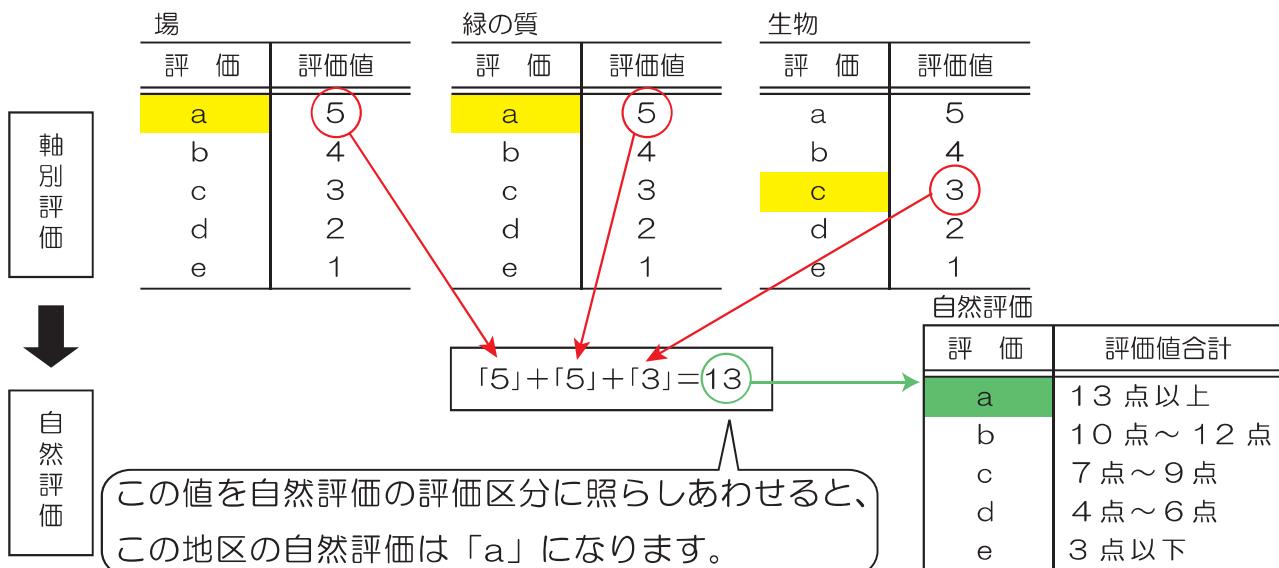
〔自然評価〕

各軸の評価値を合計し、その大きさで5段階評価しました。大地区の評価はA～E、小地区的評価はa～eで表示しました。

自然評価の算出例

ーある地区の場合ー

場の評価が「a」、緑の質の評価が「a」、生物の評価が「c」であった。



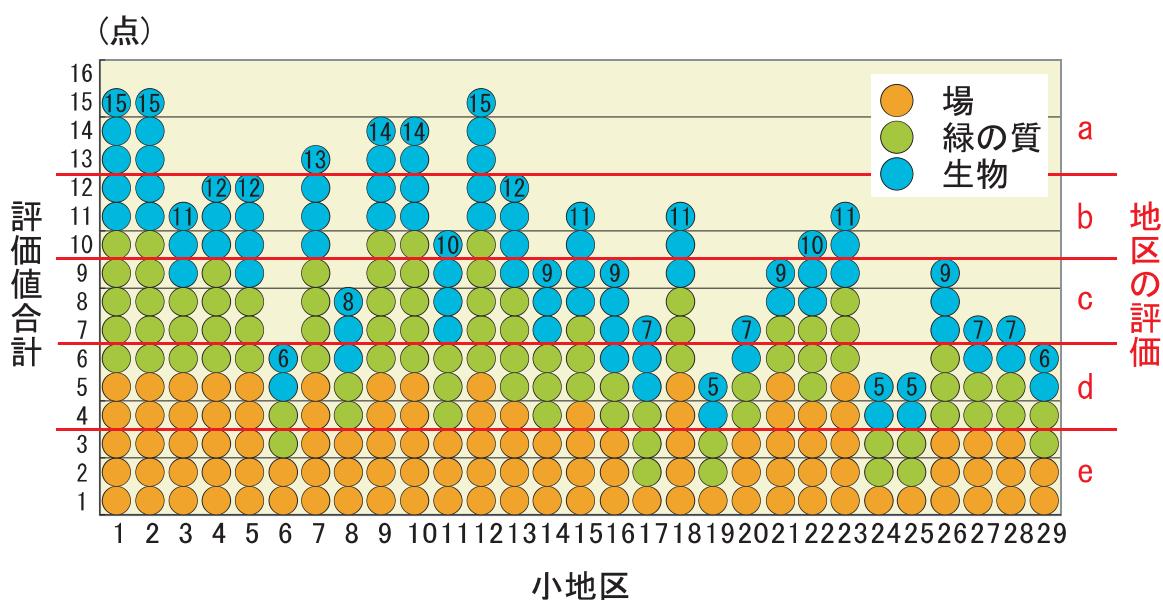
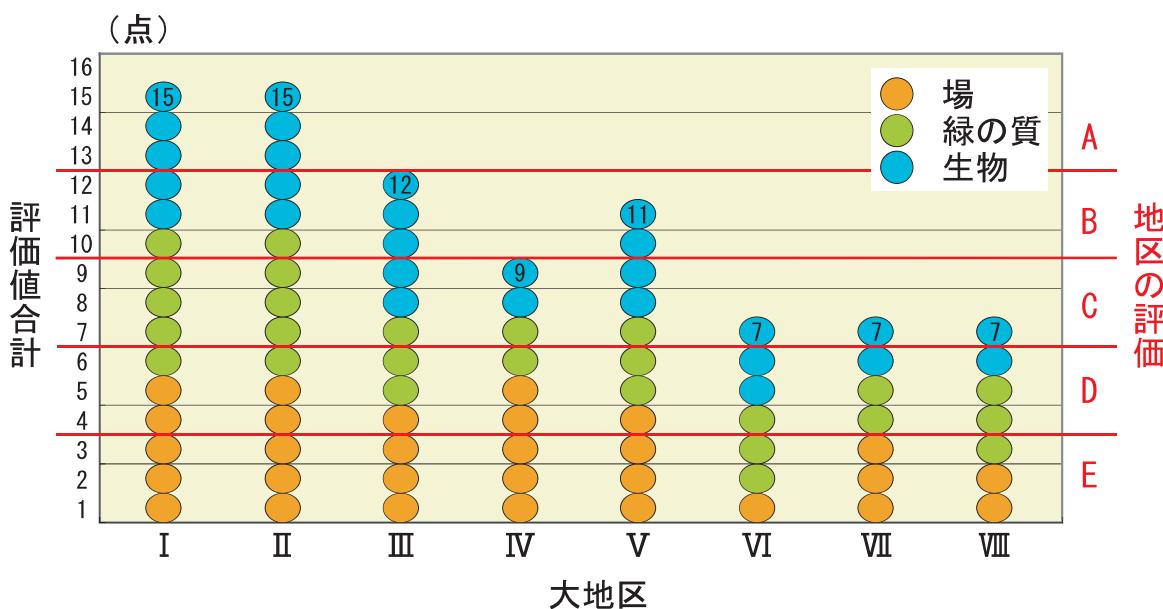
2.6 自然評価の結果

大地区、小地区の各地区の評価の結果の一覧は下のグラフと右表のとおりです。

A～E（小地区はa～e）の5段階で評価し、Aがもっとも高評価であることを示しています。中でも座禅川上流と鷹取山山麓の評価が高くなりました。この2地区は、骨格となる地形上にまとまりのある緑が残っている場所で、自然性の高い場所に生息、生育する生物が確認されています。

さらに小地区をみると、座禅川上流と鷹取山山麓の中でも、愛宕山や駒ヶ滝付近、松岩寺周辺の評価が高くなっていることがわかります。

■自然評価



◇自然の評価の結果一覧

大地区の評価				
I 座禅川上流				
自然	場	緑の質	生物	
A	A	A	A	
II 鷺取山山麓				
自然	場	緑の質	生物	
A	A	A	A	
III 神奈川大学周辺				
自然	場	緑の質	生物	
B	B	C	A	
IV 金目川段丘				
自然	場	緑の質	生物	
C	A	D	D	
V 金目川低地				
自然	場	緑の質	生物	
B	B	C	B	
VI 不動川中流				
自然	場	緑の質	生物	
C	E	C	C	
VII 遠藤原台地				
自然	場	緑の質	生物	
C	C	D	D	
VIII ゴルフ場				
自然	場	緑の質	生物	
C	D	C	D	

小地区の評価				
地区	自然評価	場	緑の質	生物
1	a	a	a	a
2	a	a	a	a
3	b	a	c	c
4	b	a	b	c
5	b	a	c	b
6	d	d	d	d
7	a	a	b	b
8	c	c	d	c
9	a	a	a	b
10	a	a	a	b
11	b	c	c	b
12	a	a	a	a
13	b	b	b	b
14	c	c	c	c
15	b	b	c	b
16	c	c	d	b
17	c	e	c	c
18	b	a	c	c
19	d	e	d	d
20	c	c	d	d
21	c	a	d	d
22	b	b	c	c
23	b	a	c	c
24	d	e	d	d
25	d	e	d	d
26	c	c	c	c
27	c	c	d	d
28	c	c	d	d
29	d	d	d	d

大地区の評価

A・B・C・D・E
評価高 ← → 評価低

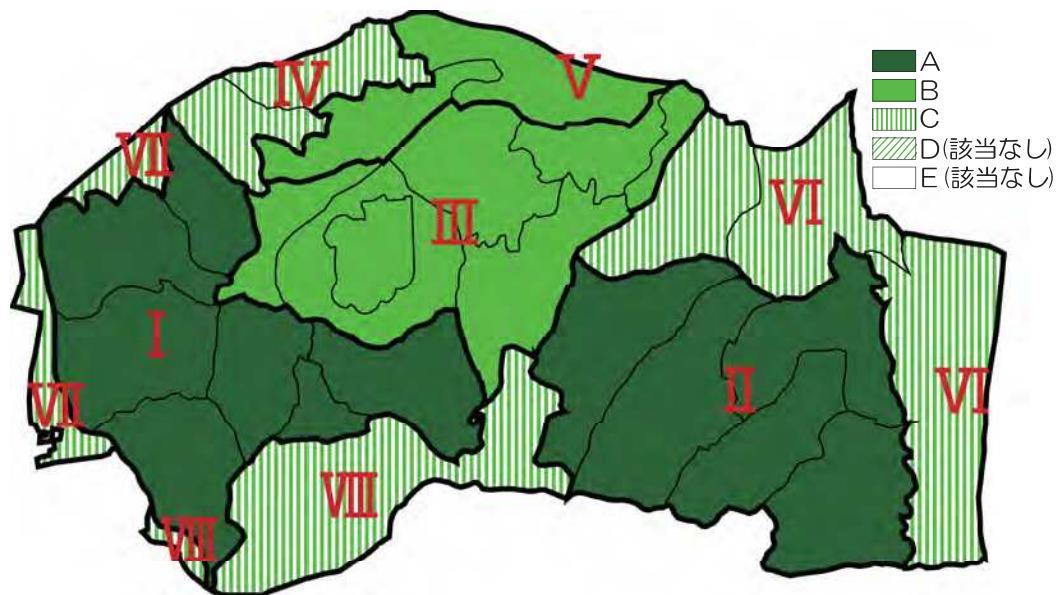
小地区の評価

a・b・c・d・e
評価高 ← → 評価低

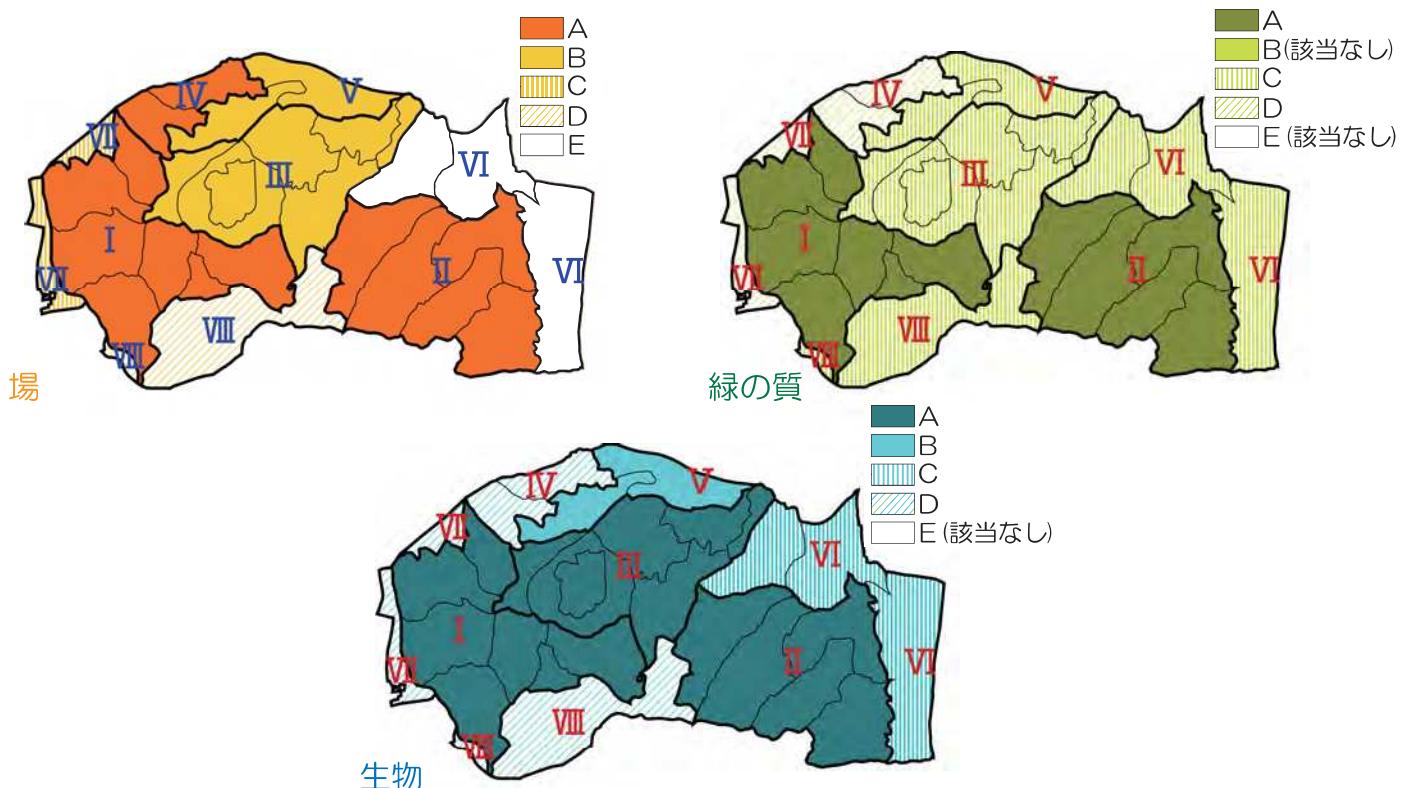
※大地区の評価は、小地区の評価を積み上げたものではありません。

【大地区の自然評価】

大地区の評価は、土屋の愛宕山一帯を含む座禅川上流（I）と吉沢の鷹取山山麓（II）の2地区がA評価でした。両地区とも骨格となる地形があり、緑の質が高く、多くの指標種が生息していることを意味します。これに次いで、神奈川大学周辺（III）と金目川低地（V）がB評価、金目川段丘（IV）、不動川中流（VI）、遠藤原台地（VII）、ゴルフ場（VIII）がC評価でした。D、E評価の地区はありませんでした。西部丘陵地域は、全体的に緑が多く自然が豊かであるため、緑が少ない地区でも周囲から訪れる生物が、比較的多くみられました。そのため、自然評価では、場、緑の質、生物の評価のいずれも評価が低くなるような、自然に乏しい地区はありませんでした。



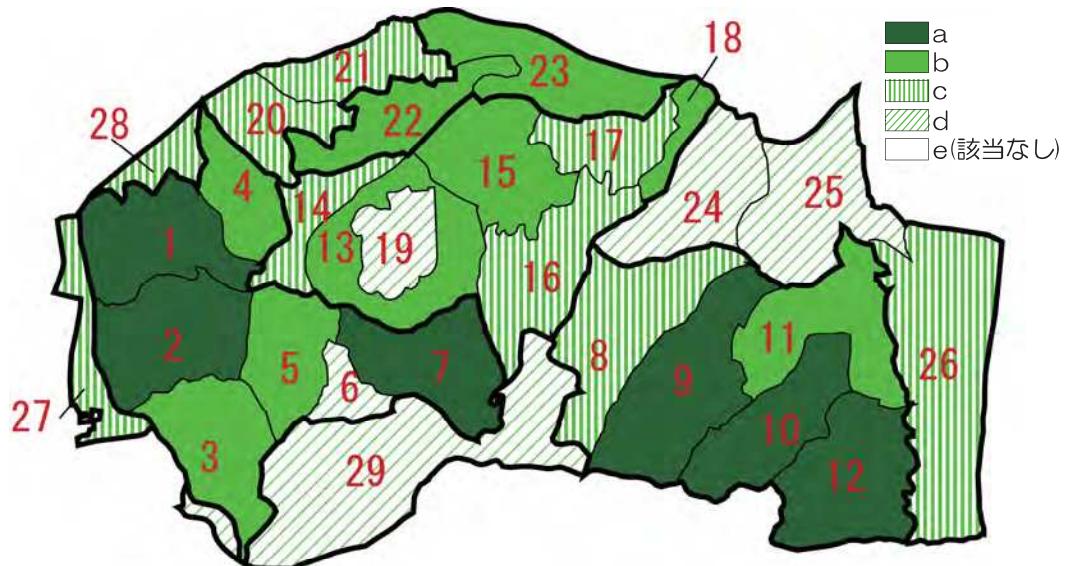
■大地区の自然評価



【小地区の自然評価】

小地区の評価は、大地区でA評価であった座禅川上流（I）、鷹取山山麓（II）地域の中で、特に駒ヶ滝や愛宕山（1,2）、松岩寺周辺（12）の評価が高く、場、緑の質、生物のいずれもa評価でした。この地区がI、II地区内でも特に重要であるといえます。

なお、新しく整備された畠地（6）、住宅など人の利用が進んだ地区（19,24,25）やゴルフ場（29）は低い評価となりました。



■小地区の自然評価

